

# 林葉累塵集

林葉累塵集第二

春歌中

春野やく所よめる

長流

古草は蛍のたねものこりなく

春の野火とやまだきもゆらむ

林葉累塵集第五

夏歌下

蛍をよめる

読人不知

なごりなく朽ちぬべき身ぞなげかるる

草の蛍の光見るにも

僧禅秀

君忍ぶ草のほたるとみゆるかな

声せぬものよるはもえつつ

契沖

蛭のみしげさまさりて五月雨に

み山がくれの草やくつらむ

治賢

草ふかき宿の蛭をささがにの

糸にかかれる玉かとぞみる。

通直女

夏草にからをとどめし空蝉の

たまのゆくへや蛭なるらん

みちのくにの名あるとじうとじうをよめりける歌の中に

通直女

とぶほたる玉造江のふねとのみ

音にもたてずこがねてぞゆく

ほたるの歌

僧道明

夕やみのくらきを空の煙にて

沢の螢ぞ下もえて行く

長？

あはれにも打ちひかり行くほたるかな

雨のなごりのしづかなるよに

桑折宗巨

五月雨は星めずらしき夕ぐれに

それかと見えて飛ぶ螢かな

水辺螢といふ事を

読人しらず

水底に思ひをけたぬさざれ石の

せぜの螢ともえや出づらん

河辺蛩といふことを

僧禅秀

杣川の筏のこのともし火は  
蛩なればや影の涼しき

長？

住む鴨ぞなほ立ちさらぬ夏み川  
山かげにして鳴くほたるかな

夏歌の中に

吉浦信常

過ぎにけり窓の蛩の涼しくも  
秋かぜ吹くとつげの枕に

友方

暮れゆかば蛩の火にも燃えぬべく  
ひるはしほるる野べの夏草

行顕

みそぎする川べとびかふ螢火の  
かかやく神やまづなだむらむ

林葉累塵集第六

秋歌上

大田資早

はるる夜の天の川べの螢かと  
つまむかひ火の影ぞまがへる

林葉累塵集十一

恋歌一

夏恋といふことを

通直妻

君が住むあたりの草にたが玉の  
螢となりもゆとかはみる

「国歌大観」より